

9. 排卵誘発薬にはどんな種類がありますか？

不妊治療で排卵誘発剤を使う場合には、1) 排卵していない場合(排卵障害)、2) 排卵障害はないが、タイミング指導などでは妊娠しないので治療をステップアップする場合(原因不明不妊も入ります)、あるいは人工授精を行う場合、3) 生殖補助医療を行うために採卵をする場合が考えられます。

排卵障害がある場合には、その障害の発生部位と重症度で排卵誘発剤を選択します。生殖補助医療では多数の成熟卵を採取するのが目的ですから、一般的にはゴナドトロピン製剤などを用いて強力に刺激します。これを調節卵巣刺激といいます。

1) クロミフェンおよびシクロフェニル

脳から放出される卵巣を刺激するホルモン(黄体化ホルモン(LH)、卵胞刺激ホルモン(FSH))の分泌を促進して、卵巣を刺激します。これらの薬は内服剤で、通院回数が少なく副作用が少ないので投与しやすいため、軽度から中等度の比較的軽い視床下部性排卵障害によく使われます。また、排卵があっても妊娠しないような症例、あるいは人工授精を行う周期で適切な排卵日を設定するため、などにも頻用されています。副作用は少ないですが、多胎妊娠がやや増加することが報告されています。

2) ゴナドトロピン製剤

注射剤であるゴナドトロピン製剤は、脳から放出される卵巣を刺激するホルモンそのものです。クロミフェンやシクロフェニルが無効な排卵障害に使用されます。ゴナドトロピン製剤は強力な排卵誘発効果が報告されている一方で、副作用として多発排卵による多胎妊娠の増加や、卵巣過剰刺激症候群などの発生頻度が高いことが報告されているので、使用にあたっては十分な注意が必要です。

ゴナドトロピン製剤には、(1)閉経後の女性の尿から精製した FSH と LH の療法を含有する hMG 製剤、(2)hMG 製剤から LH 成分を除去して FSH のみにした精製 FSH 製剤、(3)遺伝子組換え型 FSH 製剤があります。遺伝子組換え型 FSH 製剤は特殊な注射器を用いて安全・簡便に自己注射が可能となっています。一般に、hMG や FSH 製剤を連日投与して卵胞の発育を促し、一定の大きさに達したら、LH 作用のあるヒト絨毛性ゴナドトロピン(human chorionic gonadotropin: hCG)を投与して排卵を誘起させます。

3) 高プロラクチン性排卵障害に使用するドーパミン作動薬

産後に母乳を分泌させるホルモンをプロラクチンといいます。このホルモンが産後以外の時期に高くなると、排卵障害の原因となります。これを高プロラクチン血症といいます。この場合は、麦角アルカロイド誘導体であるブロモクリプチンやテルグリド、カルベゴリンを用います。内服により高い確率で排卵させます。